Staatskapelle Dresden

Christian Thielemann, *Principal Conductor*

1st Violin
Roland Straumer, *Concert master*
Jörg Faßmann
Thomas Meining
Christian Uhlig
Johanna Mittag
Barbara Meining
Birgit Jahn
Henrik Woll
Anja Krauß
Annika Thiel
Roland Knauth
Anselm Telle
Franz Schubert
Ludovica Nardone

2nd Violin
Holger Grohs, *Concert master*
Matthias Meißner
Stephan Drechsel
Olaf-Torsten Spies
Mechthild von Ryssel
Alexander Ernst
Lukas Stepp
Martin Fraustadt
Robert Kusnyer
Yukiko Inose
Michael Schmid
Ami Yumoto

Viola
Florian Richter *
Andreas Schreiber
Anya Dambeck
Michael Horwath
Uwe Jahn
Ralf Dietze
Zsuzsanna Schmidt-Antal
Claudia Briesenick
Susanne Neuhaus
Fabian Lindner

Violoncello
Norbert Anger, *Concert master*
Tom Höhnerbach
Martin Jungnickel
Bernward Gruner
Johann-Christoph Schulze
Anke Heyn
Titus Maack
Natalia Costiuc

Double Bass
Andreas Wylezol *
Martin Knauer
Petr Popelka
Christoph Bechstein
Johannes Nalepa
Fred Weiche

Flute
Sabine Kittel *
Andreas Kißling *
Bernhard Kury
Beatriz Soares

Oboe
Bernd Schober *
Céline Moinet *
Sibylle Schreiber
Michael Goldammer

Clarinet
Wolfram Große *
Robert Oberaigner *
Dietmar Hedrich
Egbert Esterl

Bassoon
Thomas Eberhardt *
Philipp Zeller *
Erik Reike

Contrabassoon
Andreas Börtitz

Horn
Robert Langbein *
Zoltán Mácsai *
David Harloff
Julius Rönnebeck
Miklós Takács
Eberhard Kaiser

Trumpet
Mathias Schmutzler *
Tobias Willner *
Volker Stegmann

Trombone
Uwe Voigt *
Jonathan Nuß *
Guido Ulfig
Jörg Lehmann

Timpani
Thomas Käppler *
Manuel Westermann *

Percussion
Dirk Reinhold

Jan Nast,
Managing Director

Alexandra MacDonald,
Assistant to the Managing Director

Maria Grätzel,
Assistant to Christian Thielemann

Valerie Seufert,
PR & Marketing

Matthias Gries,
Orchestra Stage Manager

* *Principal*

Partner of the Staatskapelle Dresden
VOLKSWAGEN
AKTIENGESELLSCHAFT

曲目解説

舩木 篤也（音楽評論家）Atsuya Funaki

歌曲やピアノ曲のイメージが強いロベルト・シューマン（1810－1856）だが、彼にも早い段階から「交響曲」への野心があった。それは少数者のためのものではなく、よりパブリック（公的）な音楽だ。試作を経て、ついに1841年、矢継ぎ早に交響曲（もしくは準交響曲）を完成させたのは偶然ではなかろう。というのも、シューベルト最後の交響曲《ザ・グレイト》をウィーンで発見し、ライプツィヒに送って世界初演させたのが1839年。ピアニスト、クララ・ヴィークと、その父親の猛反対を押し切って結婚したのが翌40年。つまり、社会的責任と幸福感の高じた、まさにその時に、管弦楽への大きな一歩を踏み出したのである。作曲家30歳の時のことだった。

シューマン：交響曲第1番 変ロ長調 Op.38「春」

曲はトランペットとホルンによるファンファーレで始まる。これには、いわば歌われない歌詞があって、それを「おお、変えよ変えよ、お前の行く手を」という。続く管弦による応答部分は、「谷間には春が萌えている」という。いずれもアドルフ・ベトガーなる詩人による「春の詩」の一節で、シューマンはこの詩に霊感を受け、本作を着想したのだった。ドイツ語原文で読んでみると分かるのだが、たしかに、詩句のリズムと音楽のリズムはぴたりと一致する。

元の詩を参照すると、「お前」とは、冬景色を統べている「雲の霊」のことだと分かる。つまりは冬から春へ。しかし、この第1楽章の序奏では、まだ冬は完全に去っていないのか、すぐさま鋭い総奏でニ短調の陰がさす。いつしか弦楽器の3連符の連なりが、雪解け水のようにさらさらと流れ行くようになると、春の爆発はもうすぐそこ。ファンファーレのリズムを倍速にして、主部が始まるのだ。

しかし、こうした種明かしのような説明を、シューマンは嫌がるかもしれない。当初スケッチに記してあった各楽章の標題、1.「春のはじまり」、2.「夕べ」、3.「楽しい遊び」、4.「春たけなわ」も、初版譜を出す段になって全部とり除いてしまったくらいだから。あくまでも純粋な音の構築物、「交響曲」であると、宣告したかったのだろう。

1841年3月31日、ライプツィヒにてメンデルスゾーンの指揮のもと実現した初演は、大成功のうちに終わった。クララと結婚し、「行く手を変え」、初めて迎えた春だった。

第1楽章　序奏：アンダンテ・ウン・ポーコ・マエストーソ ― 主部：アレグロ・モルト・ヴィヴァーチェ
第2楽章　ラルゲット
第3楽章　スケルツォ（モルト・ヴィヴァーチェ） ― トリオ1（モルト・ピウ・ヴィヴァーチェ） ― スケルツォ ― トリオ2 ― スケルツォ ― 終結部
第4楽章　アレグロ・アニマート・エ・グラツィオーソ

シューマン：交響曲第2番 ハ長調 Op.61

「数日前から体の中でずっと太鼓とラッパが鳴っています（ハ調のトランペット）。ここから何が生まれるのでしょうか」。シューマンは1845年9月20日、メンデルスゾーンに宛ててそう書いた。

まず「ラッパ」だが、これはこの交響曲の序奏、金管群にくり返し聞かれるドとソに昇華されたようだ。

これは、以後、本作のそこかしこで現れることになる。一種モットーの役割を果たしているといえよう。

「太鼓」についてはあとで触れるとして、この交響曲に特徴的なものとして、いま一つ「苦闘の身ぶり」を挙げておきたい。なにか大変な重荷を、上へ上へと持ちあげてゆくかのような音の動きが、そこかしこに見いだせるのだ。一例として、美しい第3楽章のなかほど、半音ずつドからドへオクターヴをよじり上ってゆく低音弦を挙げておこう。

これらの苦闘が、ついに報われるのが第4楽章である。だがそれも幕切れでのこと。開始こそ威勢がよいものの、途中、第3楽章の哀歌と苦悶の上昇音形が去来する、暗いシーンを経る。そのうちその上昇音形が、ベートーヴェンの歌曲からの一節（「この歌どもを受け取ってくれ」）と思しき旋律へと明るく変容し、「ラッパ」の祝福を受けつつ、音楽はハ長調に収束する。そして最後、「太鼓」によるドとソの連打を背景に、弦楽器にドからドへの2オクターヴ跳躍上行が輝かしく成就するのだ。

本作は、シューマン一家が住み慣れたライプツィヒからドレスデンに移ったのち、1845／46年に書かれた。シューマンは鬱状態にあり、バッハ研究をクララとともに進めながら、難局を乗り切ったという。このハ長調交響曲の中心音「ド」は、あちらの音名ではC。クララの頭文字Cと一致するのは、たんなる偶然だろうか?

初演は、1846年11月5日、メンデルスゾーンの指揮による。

第1楽章　序奏：ソステヌート・アッサイ ― 主部：アレグロ・マ・ノン・トロッポ
第2楽章　スケルツォ（アレグロ・ヴィヴァーチェ） ― トリオ1 ― スケルツォ ― トリオ2 ― スケルツォ ― 終結部
第3楽章　アダージョ・エスプレッシーヴォ
第4楽章　アレグロ・モルト・ヴィヴァーチェ

シューマン：交響曲第3番 変ホ長調 Op.97「ライン」

1850年9月、シューマンは一家を連れてドレスデンからライン地方のデュッセルドルフに移住する。同市の音楽監督に就任したのだ。夫妻は到着早々にライン川をケルン方面に上って旅をし、そこで得た印象をもとに第3交響曲は書かれたというが、本作を必ずしも「音による風景画」として聴く必要はないだろう。《ライン》の題名は、シューマンによるものではなく、デュッセルドルフのコンサートマスター、ヴァジエレフスキが言い出したものである。完成は1850年の12月。その速筆ぶりに、クララも驚いたという。

序奏なしの第1楽章、その冒頭を普通に聴けば、大きな3拍子の動きを感じるに違いない。ところが、それではすぐに体が着いてゆかなくなる。ややこしい話だが、シューマンはここで、聴き手において錯覚が起こる ―― 123、123の拍子（3/4拍子）で書かれているのに、12、31、23（3/2拍子）と体感してしまう ―― ことを狙っているわけで、似たような感覚は、第2楽章以下にもあろう。

この種の浮遊感、割り切れなさが、独特のロマンティシズムを醸し出しており、これぞシューマン音楽の醍醐味と言える。ここでは、それがほとんど原理化されているのだ。

そう、一義的なものに留まろうとしないのは、リズム面に限らない。本作には、世俗的、牧歌的な音楽も混じっていれば（第2、第3楽章）、宗教音楽を思わせる厳かなものもある（第4楽章）。終楽章にいたっては、革命の起こった1849年にシューマンがドレスデンで書いた共和主義的な《行進曲》を聞き出す者もあるほどだ。そもそも、4楽章が基本の交響曲に5楽章を設けるところからして、ユニークではないか。

初演は1851年2月6日、シューマン自身のタクトで、デュッセルドルフにて行われた。

第1楽章　生き生きと
第2楽章　きわめて中庸に
第3楽章　速くなく
第4楽章　厳かに
第5楽章　生き生きと

シューマン：交響曲第4番 ニ短調 Op.120

これは本来、第2番と呼ぶべき交響曲。というのも、早くも1841年に、いったん初稿が完成をみているからだ。ところが、当時のライプツィヒ初演が芳しくなかったために、出版計画がとん挫、10年後の1851年に改訂が施され、1853年3月3日にデュッセルドルフにて初演（シューマン指揮）、出版も翌年に叶い、第4番とされたのだった。今回もこちらの改訂稿を聴く。

両稿の間には細部でかなりの違いがあるが、ここでは、当初から変わらない基本コンセプトの方に注目しよう。それこそが本作の独創であるからだ。

1841年の初演時の批評に、こんな一節がある。「多くの人は戸惑い、じっと静かに聴いていた人たちも、全体を通常よりもいささか長い第1楽章と思っていたのだった」。

無理もない。シューマンは楽章間に休みを置かず、これを全部つなげてしまったのだから。それればかりではない。より重要なのは、楽章間での楽想の共有が著しい点で、これが、なにか記憶がぐるぐると巡るような不思議な感覚を引き起すのだ。

第1楽章の冒頭、憂いに満ちた序奏が、じわじわと高揚してゆく過程に耳を澄まそう。いよいよ主部が来るという所で、ヴァイオリンが何度もくり返す音形は、このあとテンポの速まる主部の主題となるし、また第4楽章の序奏でも、さらにはその主部でも、再三利用されてゆくことになる。いや、「音形」ではなく、その音の連なりをごく緩やかにとらえれば、それは第2楽章にも第3楽章にも谺していると言えるだろう。シューマンが本作を、当初「交響的ファンタジー」と呼んでいたのも頷ける。

この改訂稿が初演された約1年後、シューマンは身体の激しい痛みと幻聴に耐えかね、1854年2月27日、ついにライン川に身を投げる。救出された後は、ボン郊外にある精神療養所に収まるが、1856年7月29日、46歳という若さで息を引き取った。医者の命により、クララはその前日まで夫との面会を許されなかったという。

第1楽章　序奏：非常に遅く ― 主部：生き生きと
第2楽章　ロマンツェ、非常に遅く
第3楽章　スケルツォ（生き生きと） ― トリオ ― スケルツォ ― トリオ ― 終結部
第4楽章　序奏：遅く ― 主部：生き生きと